

速達

速達

速達

日本郵便
NIPPON
★470
向日物集女
YUKO MOZUME
通用品目限り
★21★
09.08.26

251-0027

木村

15120

井勝江市

tel.

0466

—

鶴沼

藤水

21

8.27

26
7

久

6228

根岡

藤

お返し

お参りありがとうございます。

お七公館にて百年の知己にお会い

いたした。お参りの事やべし。

よりお参り。厚物。ご一。同封。御参臨。

時

二〇〇二。八月十日

古田武彦

お返し

No 128 東京七田会ニユ-マ

いの

問

論

(第十六回)

せきさん

尺寸の地を

我に与えよ

いんじんの記念塔

1~30

七田武彦

(ミネルヴァ書房)

(20×10)

—
夏が来た。夏が来た。思い出す。八月十
五日。わたしがいめて、広島を見てきた。
昭和二十年（一九四五）の夏である。十
八歳だった。

広島市の西北郊、己斐（こひ）驛（駅）西北
（島驛）に降り立ったとき、眼前に広島が在
った。わたしの知る広島が消え去ったとい
である。広島市の東北郊、比治（ひじ）山に至
る間（ま）に、その間には何も無かったのだ。

の
茫然とした。

このか、本物の人間の中のた。

し

そう実威した。ゆえに、名誉も、組織も、

財産も、その他一切が、人間には本来、無さ

ったものだった。そう思った。よみが

わったの思想、人生観、世界観の基礎となっ

た。厚燐は、その真意を明らかにした。同。

前は見せつけにくかった。

二

今年の八月六日と九日を中心として、存続
をめぐり、さまざまな番組がNHKから
放映された。いふれも、心を打つシーンの連
続だ。存続を亡くなられた方々を、その苦し
みを忘れないとする。鎮魂の調べが奥底に流
れ、感動的だった。

わたしにとっても、

八月十五日以降、翌年

の四月まで、眼前にした数知れぬ苦痛がよみ
かえってきた。生きながら、身体の中に「ラ
い」が動めいていった。その姿を見ろてゝが日

（無数に）

ヤミ市の

4

来だった。忘れよ。し。言われいも。生涯
忘れ之^め日々だった。燦^ハ地からニヤ^ワの地
ま(西親者町)へ被燦^ハ、黒い雨に打たれ
たがう。己斐(こひ)へ向った両親。満気^ハ
満善^ハや^ハだ。た々親を、大八車に乗せ一運んだ
母親。その刻たを思い浮かべた。
折しも、い^ハ車^ハの^ハヤミ^ハ市^ハの^ハ4^ハミ^ハス^ハリ^ハで^ハくり^ハま^ハえ
し^ハ数^ハ百^ハ回^ハな水燦^ハ主^ハ路^ハを^ハ行^ハな^ハぬ、^ハ死^ハの^ハ湖^ハ
し^ハの^ハ周^ハり^ハに^ハ多^ハく^ハの^ハ住^ハ民^ハが^ハ、黒^ハい^ハ雨^ハを^ハ浴^ハび
つ^ハつ^ハり^ハて^ハきた^ハこと、^ハその^ハデ^ハー^ハタ^ハが^ハ新^ハ明^ハに^ハと^ハこ^ハえ
た^ハ

壊

残さへいた。 ~~その書も知った~~ ~~の~~ ~~の~~

崩壊後のロシヤの科学者が倉庫から発見し、

それを公表した。日本の科学者が現地を訪れ

た。その報告をはいめへてしびて見た。

日本へは、二日たつたが、ここへ

数回、黒い雨し、住民の上にふりそそい

ていた。たつた。

その昭和二十年以後、はいめへ知った ~~本~~

である。

三

遼 友
6

ゆたしは新たに提案する。↑ 尺寸へせす
し。の地を我々に与えよ。し。と。

し。ゆたし、記念塔を建てるためだ。何のへ？
し。

↑ ~~遼友~~ 塔を建てた人々のために
し。と口シエの記念塔し

である。エノウ・ゲイ (Enola Gay) と
その遼友機に乗った将兵等の鎮魂しを祈る
ための記念塔である。

広島にゆたし記念塔を建てる。各寺院や各社

り

橋のたもとや

北や各教公第、^{人奉}、^{人奉}個人の庭先に一本の記念
塔や記念樹を建てゐる。日本人の魂しゝ名に
あつて。もちろん、平和公園にも。
それがかゝれたたちの彼方に手向ける「志」
である。

その記念塔や記念樹を建てるための「ゆず
る土地」(「尺寸へささる」の「地」)を。

ゆたしにふえてほしい。もう願つたのへある
^{ゆたし}私に有縁といふ無関係 ^{ゆたし}ゆたしは

⑩

た。

理甲

早

文乙

8

直ちに反応があった。わたしは、この志のあ
ることを、最初に告げたのが、本誌一久といた
った。三日前。今年の八月二十日。東京の竹
橋の学士会館の雑談室だった。
彼は、旧制広島高校の理甲出身。(英語)
わたしと
同じ大正十五年(一九二四)生。彼は一月
の早生れだが、わたしは一月生れ。だから学
年は、彼が一年先輩だ。わたしは、(ドイツ語)。
会うのは、はじめてだった。気が合った
。お互いにうなずきあったから、あ、と言う

訂正

↓

9

中に。一時拘束された。その後一時放された。
わたしは志をのべた。
言の終るや。彼は言った。
「わたしの土地に建へて下さいよ。」
と。彼は懐心地。二人の両親と三人の兄弟
を笑っていた。彼自身も、袖懐者だった。そ
のため、^{玄島駅}懐心地近へ寄（日蓮宗、国前寺）に
墓地を買った。所有していたのである。その
土地に「建へてはういし」
跡は間隙を入水す。と言ったのである。

わたしは京都の「公義」の桐牛が、直ぐに
土地を提供してくれろ、という、稀有の事だ
を乞うたのだ。

無類の

④

彼は京都土着の物理学者（理論物理学）出
身。湯川秀樹さんの養子だった。土着も出
たあと、中央公論社に入社したけれど、当然
ながら自然科学系のジャーナリストとしての道
を歩んだ。五人の家族を有島へ送った彼に對
し、湯川さんは絶えず、心に掛り、親切にし

いくたさ、たという。佐に、石島からの家族
 避難しをすすめた。たに。この一帯に
 にな、いかられたのへあろう。一水田泰次
 君が西村教授から、石島からの避難をすす
 められた。同じ研究室に湯川さんもおら
 れたという。前回(詳述)「日本車」
 書と。A B C C の所長と懇意になつた
 。 A B C C の。石島市の比治山の上に造られ
 た。アメリカ側(石壕被害)調査機関が
 。 けた。町内をうろちる。様子にあ

もおいたけれど、治療は／＼切ない。そのまゝが
 広島市民、被爆者の、不満となっていた。
 その所長と森さん、親しく話し合った。湯
 川さんの希望として、新卒の判方、森さん、
 親、片を考へてくれたようである。
 そのとき、森さんが、自分も被爆した。
 と言うと、お母さん、待て。と言う人。
 星の部屋へ行く。たまたまの早稲を女に
 帰った。お母さん、お母さん。広島市街地の
 町、一軒家を上から撮影した早稲だった

あなたの家、いゝおたのしみ
 聞こ。それに答へると、やがて写真のや
 ら、彼の家を「探し出し」た。
 この家だね。この家のどこにいた？
 ニ階の窓へいた。
 ニ階のこの部屋が。ここか。
 ここに、さやと。自分の家の、自分の
 部屋で、眠し出され「いた」
 っ、こちらに白々。寝ていた。

へこちたし
 とういう間接かくりをいさへ、
 のくち、彼、被爆した場所、その精細な家
 と部屋まで、すべて「指針をみ」たこと
 を知らされた。もちろ、存続指針、前
 の指針がある。
 今、常識となつてゐる、自動車、カー
 ン、アメリカの軍事用目的に開発された
 ものであり、連年の冷戦終結後、商業用
 として公開された。その指針、開いたこと

かあつた。しあし。ここから、居場所を以前、
 しの居場所が、丸ごと、にさへいれた。金
 くらひたつた。

つてにていす。

彼のあつた一語は、的確な。あつた。

た。この単語は、居場所の存在も、時には使

わい、いれた。彼の、一語は、もつとも絶

く、もつとも射入つたのである。

また

五

結い、た。

16

✓ 降

東海道線は爆撃を喰った。いらないでーと。

アメリカ軍は空軍に制空権をにぎり、お水が

け凍るん。絨繻爆撃をくらふとしんじ

のだから。東海道線など、簡単に何回も爆

撃を受けたのは、しんじはする。し

何回かころす。一回爆撃すれば、東海道

線は止まりやすね。し

当然。彼等は、爆撃を喰った。爆撃しな

いたのへあ。し

ゆたににも、にきりかあった。昭和二十

19

9月 仙台の東北大学へ行ったとき、東海
逆巻を通った。無事だった。八月下旬、
広島から長崎の佐世保（浦戸）へうらかしら
しにいた。軍医の足もところへ行ったときも
山陽線以西。すべて無事だった。破壊
されな^はいながら、たのがある。
もし、東海逆巻が山陽線、長崎に至る鉄道
が、一帯、あつた。爆弾投下され、いかに
、と、時、日本側の、鉄道能力は
破壊、いたげだが、本島直撃、いところの

あまて

(戦勝後の使用もはかめ)

[illegible]

モ
カ
リ
ノ
ノ
島
ノ
島
崎
江
ノ
厚
燦
を
指
下
す
る

し
ため
に
そ
。
長
崎
市
街
地
の
中
の
一
家
に
の

「
路地裏」
「
二階」
「
下」
「
上」
「
中」
「
外」

振 8 9 9 2
た っ
た 2
と
ゆ
に
に
に
に
う
2

~~7/11~~
 7
 11
 12
 5
 0

[illegible]

米に都市
の年頭
市に控
都市に

また、
海する

彼の何れも、
 ったのである。いふれも、都市の地形しか
 重慶にふさわしなうたならぬ。
 京都よりも広島、新潟・小倉よりも長崎。
 彼等の、重慶のつくりかた、の移動にすぎた
 かつたのである。
 五
 愚者の仕事だ。だが、彼等は人間になった。
 上官の、国家の命に従った。否、従わせられ
 いたにすぎない。
 あるが、生涯に、上下行為を悔い、
 彼等の

20

その期間の中に一生を終えたという。ある者
は、指下の正當性を誇り、戦争終結に對
する、お世をえぬ行為、すばらしい戦果
を誇ったことを誇る。(チャールズ・W・ス
ウィーニー) 彼はヒトラー、ナチスに
しこしこ、お世をえぬ表面、人間の後
面にはすざまじいお世をえぬ強さ、心
の期間の裏返し、お世をえぬ。人間のお
世をえぬ、戦争口本、お世をえぬ通すこと
、お世をえぬ不可能だ。

原稿を提出したとき、原稿、二〇〇年刊

だから。わたしは経済の、人間の總し、のた
めに在る。そればかりでなく、日本人の總し
の、ありあけの、たのしみである。

六

天下の要諦がある。日本。立場を拂つて
し。の主張が、いかに。立場は。一歩も
進み。相手は改められたい。と、抑止が
ある。と、そののちである。名島へ講演して
た。このこと。田部神名機。自らの身体願
い。WAC出版。以降各著。し。

「北朝鮮は核で脅かす」 will 2009 6月

の簡単な引き算の問題だ。
 だから、もし、所有するのなら、三万
 七千を「持つ」べきだ。アメリカ、大々数有
 、ロシア、一万二千、中国、五百数十、イン
 ド、バキスタン、北朝鮮、各数、併せ
 二万数千だ。インド、バキスタンを除い
 も、総計に大差はない。これらの国々（の合
 計）以上に、日本がもつたならば、その抑止力
 といふ、意義はあろう。
 一、そのように、巡遊艇に居るを搭載し

一、日本列島周辺を巡行させた一も、
 の総計は、中国側の十分の一以下。比較にも
 たらぬ。いたすには、彼等に警戒させ
 るにせむらう。(伊藤賢司 中国の「核」加
 世界を制する P H P. ニ○○文利、参照)
 以上、日本がいったん、原爆を握る
 ため、周辺国は黙つていた。アフリカ、
 という上に、総計二万数千発、三万台、五
 万台へと上昇しよう。
 北朝鮮も、またたく間に数十発
 をもつて加える。(十数発あるいは)
 そのうちに、いよいよ「ゲリ」が小規模

帝を所有し、大國を改竊する日は、遠く
 ないのである。日本側の「一帯」が「数」
 の存続所あり「おさむる」問題である。
 今、地球~~の~~の~~上~~に~~住む~~人類の「国家」が、
 多岐に、みまら「作り出した」原子爆を
 自今の手で「管理」すべきである。その暴走大
 道とひたすら駆け降りてゐる。その最中た
 のだ。
 文字通り、誰人にも、止めらなないの
 である。これが地球の現在~~の~~だ。
 の~~未来~~を~~垂う~~手

七

人類の希望は、日本にある。唯一の被爆国
であるのに、一帯の存続も、所有しにくい
。作つていく。その科学力、経済力、知能
力は、十分、製造可能。なのに、もつてい
ない。のがある。
豪快な人だ。不十分だ。自衛のため
に、もううろからてある。三層のい
もつて不十分だ。アメリカ側への
しげ。国物の希望だからである。
にみえる。つうふつしつ

（日本の存続所あるとは、その希望は、補助板した、係主任の核）

本巻
みか
たか

これに提案した。

憲法改正（を行ない、新憲法、第一等）

の原水爆の存在を（明瞭に）主張し、改正不能

の一文を（する。革命）以外に、改正の道

はたつ。かういふ、新に憲法だ。

もしも、原水爆を防ぐための、科学力に

国家が全力を傾注する。そして、未来の日本

人類の幸福である。

現在の地球を且つ、

人類を（~~破壊~~）造った、造物を

し、数いふ、いふ、ある、人肉を作ったの

は、わたしの失敗だった。

小たはは歎かぬ。人肉には、手に余る。
 存水煙を透つて、能力もなす。小い、断乎、
 小水をつゆめ。こゝも、いさゝか。その意を、
 希求も、もつて、この、いさゝか、動物、小い、人
 間。ハッカリと。
 小の、人肉、の、孝孝、に、こゝ、い、つ、希求、の、目、は、
 小の、い、つ、日本、の、い、の、い、なる。
 小た、い、小の、い、の、い、なる。其、
 存水、を、お、下、した、小の、い、の、い、なる。一、記
 念、

を名島のついでに書かれた
日本人の總の名に
おいて。
みかたのついでに
ある。

二〇〇大
八月二十二日
終了。

記念塔の文面（裏）は次の通りだ、

原爆をお下した

人々のために祈る

つとめてし記念塔

平成二十一年（二〇〇

小サ

大

月

日

日本人の魂

けようやうき

エノケンくまの遊園地

のふたに

（上記 英文）